

我が家のラビキャッツ庭に春の珍事3件

我が家の「ラビキャッツ(ウサギ Rabbits 小屋のネコ Catts の額)庭」では、毎年専ら花を所狭しと植え込んできたのですが、今年は野菜に手を出したため少々変わったことが起きました。

その野菜というのが、右の写真の濃緑の鉢に植わった空豆(手前から2番目と4番目)と白菜(手前から1番目と3番目)なのですが、よほど園芸にお詳しい型でなければ特に白菜を見分けるのは難しいのではないかと思います。

白菜の英語名は「中国のキャベツ」を意味する Chinese cabbage(チャイニーズ・カベツジ)だそうですが、これは通常はキャベツのように葉を巻き込んで結球するからだそうです。



ところが私の白菜は、あけっぴろげ。少しも葉を巻き込むことなく、葉を広げながら上方へ向けて成長してきたのですからどう見ても白菜には見えません。しかし、成長する過程で広がった葉を収穫して鍋物の具に使ったりしてきましたが、食味はまさしく白菜で、なかなかおいしく食べることができました。

そのうえに我が家の白菜は、上右の写真のように黄色の花を咲かせ、写真撮影後には更に花数を増し、彩鮮やかな黄色で我が家の「ラビキャッツ畑」を飾っていました。我が家のカミ様(カミさんの尊称です)「あら、綺麗な菜の花が咲くのねえ」と言うので私は「形は確かに菜の花に似ているけど白菜に菜の花が咲くわけないだろ」と言っていたのですが、調べてみると、「菜の花は、アブラナ科アブラナ属の花の総称」で、ハクサイは、ナタネ、カブ、キャベツ、ブロッコリー、カラシナ、ザーサイなどとともにアブラナ科アブラナ属なのですから、我が家のカミ様の言った通り「ハクサイは菜の花を咲かせる」という説は正解だったわけですね。なんだかハクサイが咲かせる菜の花は、♪菜の花畑に入日薄れ♪と歌われている唱歌「朧月夜」の「菜の花」と似つかわしいようには思えませんが、では、唱歌「朧月夜」の「菜の花」を咲かせている植物は何かと言えば、「この曲の作詞者である高野辰之氏のふるさとで栽培されていた野沢菜(これもアブラナ科アブラナ属)をイメージしたものではないか」と AI は教えてくれました。更にいえば、「菜の花」の「菜」とは食用の意味だそうですから、「菜の花」とは本来「食用の花」の意味だったようですね。コマツナ、ハクサイ、チンゲンサイなどは葉を若どりして食べるものですが、そのまま育てて莖立ちさせると、黄色い花が咲いて花蕾を食べることができるのだとか。

ところが、このあけっぴろげ育ちの白菜が、とてつもない怪奇現象を起こしてくれました。私たち夫婦が目線を送っている先にあった大きめの白菜の葉が、風もないのに上下運動をしているのです。定刻的な感じで、葉先が上を向くとしばらくして葉先が下向きになる。この状態が何回となく続くのです。「あら、なんだか気持ちが悪いわね」と怖がるカミ様と一緒に怖がってはられない我が身。ちょっと指で白菜の上部を示して、「ほら、上にあるハナミズキの枝から定期的に雨水が落ちてくるから、それを受けて白菜の葉が上がりたり下がったりしているだけさ。ほらね。」と言ったのですが、この「ほらね」に應える動きは見え、白菜の葉が1枚だけ上下に動いているのです。さすがに薄気味悪くなった矢先に、白菜の葉陰からスズメより一回り大きく灰色っぽい鳥が姿を現し静かに飛び去って行きました。この鳥も後程調べてみま

したが「ヒヨドリ」だったようですね。「庭木の実や花の蜜を食べるため、宅地の庭木や公園でよく見られる。」と説明があります。これまで白菜の葉が食い荒らされている様子を何回も目にしてきたのですが、食い荒らしていたのは虫ではなくてヒヨドリ君だったんだね。この日の葉っぱの陰で葉を上下に動かすだけで上品に白菜の葉をつついていたことを知ってヒヨドリも「君」付け呼称になりました。いやー、ヒヨドリ君が我が RC 庭を“宅地の庭木や公園”並みに見ていてくれたんだと嬉しく思えたからかな。

さて、春の珍事の第三弾は、北九州の門司から里帰りしていた次女・知子のご主人の敬司さんが撮ってくれた右の写真の中に写し出されています。お分かりですか、我が RC 庭に入り込んでこちらと目を合わせている動物が。そうそうタヌキ君です。実は、3週間ほど前にも三日間ほど続けてお隣さんとの境目になっているフェンスの向こうまで来ていて、私と親しげに顔合わせていたのです。「今日はフェンスを越えて RC 庭内に入り込んできたのに、あの仲良しの爺さんはどうして今日は顔を出してくれないのかなあ」と不思議がっているような表情に見えませんか。いやあ、実は私の方こそ、「せっかく再訪してくれたのに」と残念な思いをしながら、このフォト・レポートにしばし見入っていたものでした。



しかし改めて思えば、前回初お目見えしていたのは、もっと小柄な狸だったように思えます。「なんだ、“狸親父”だの“狸寝入り”だのと暗いイメージでしか語られない狸だが、君も結構ハンサムじゃないか」と目を合わせながら語り掛けているうちに、狸のイメージが一新し呼び方もタヌキ君に変化していたのです。三日目の日には、私も頃合いを見てサンダル履きになって、目の前で顔を合わせたのですが、決して逃げる素振りも見せず懇親を楽しみあっていました。しかし、そんな時に私の背後に走る細道に入ってきた車が軽い軋み音を発するや否や、“我が敵来襲”と思ったのか、急激に体の向きを 180 度変えて、そのままものすごい勢いで、お隣さんの縁の下に駆け込んでいきました。そしてそれが最後で、次の日からは姿を見せなくなりました。私は「突然野生動物の姿に戻って縁の下に駆け込んだのは良いものの、真っ暗な縁の下を突っ走っていったのだから、障害物に突き当たって即死するか重傷を負ったに違いない」と思っていました。そこで私は、「今回現れた少々太めの狸は、もとのタヌキ君ではなくて、重症が癒えず逝去したタヌキ君の訃報を伝えるために現れた狸親父に違いない」と思いこむ結果となりました。

私が辻堂に居を構えたのは 50 年余も前のことでした。私の家の前を通る道はもっと狭くて車が入ってこられない状態だったので、子供たちにとっては格好の遊び場になっていました。そして、その道の先には林があって行き止まりの状態になっていたのです。その頃は木が立て込んでいるその林の地が狸の格好の住処となっており、そこから住宅街に出没する狸が目撃されていたのですが、今やそこに建売住宅が 6 戸ほど立ち並んでいますので狸の住処があるはずがありません。きっと、半世紀も経って“日本一住みたい街”とも呼ばれるようになった辻堂の住宅街のどこかにウサギ Rabbits 小屋より遥かに小さいタヌキ Raccoon dog 住まいに居を構えて代々生き延びてきたタヌキ君ないしは狸親父殿の姿を見るととても嬉しい気がします。今日も頃合いを見て我が家のラビキャッツ庭に出て、「また出ておいでよ」と小さな声でラブコールを送りました。